



若手ドクター の広場 ①



日々の臨床, これまでの臨床研究, 地域での研究会活動について
Daily clinical practice, past clinical research, and local group activities

医療法人厚生会道ノ尾病院精神科 福嶋 翔 Shou Fukushima

はじめに

この度はこのような機会をいただき誠にありがとうございます。私は長崎大学を卒業後、長崎大学病院で初期研修と内科後期研修を終えたのち、佐賀県の国立病院機構肥前精神医療センター(以下、肥前)で精神科の後期研修を過ごしました。2016年から厚生会道ノ尾病院(長崎市)に勤務し、現在6年目になります。その傍ら、長崎大学大学院に所属し、肥前での臨床研究で医学博士を取得致しました。

アルコール依存症との出会い

私がこの病気と出会ったのは、肥前の病棟の集団プログラム内でした。一見普通そうに見える方々が、退院するとすぐ再飲酒してしまう病態に疑問をもち、それから依存症の臨床や臨床研究に携わることになりました。病院長の杠岳文先生や病棟医長の武藤岳夫先生、病棟スタッフ、そして何より患者さんにさまざまなことを教えていただき、現在の臨床業務のみならず私の考え方にも大きな影響を受けました。

これまでの臨床研究

気になったら自分で検証したくなる凝り性が起因し、これまでも依存症患者の転帰調査やプログラムの満足度調査、病気に対する病棟スタッフの陰性感情など

自分なりに調査しました。肥前でも磁気共鳴機能画像法を用いてアルコール使用障害患者を対象とした脳機能画像(functional MRI:fMRI)研究を行いました。具体的には、米国精神医学会による精神疾患診断分類の第5版となる『DSM-5精神疾患の診断・統計マニュアル』(医学書院, 2014)で中等度~高度のアルコール使用障害と診断がつく(かつ、入院してプログラムに参加している)患者と健常者を対象にして、非アルコールやアルコール飲料の写真を15秒ずつ複数回、交互に視覚的に提示し、その状態で撮像した脳機能画像データを2群で比較するという研究です。多重比較の結果としては、左後帯状回や左右の楔前部(脳梁の辺縁)において、物質刺激(飲み物を置いているだけの画像)よりも行動刺激(飲み物を飲んでいる画像)がアルコール患者と健常者の脳の反応の違いが大きいことが示唆されました(図1)。また、アルコール使用障害患者の脳は、「アルコールを飲む行動」を伴う刺激へ強く反応する一方で、「非アルコールを飲む行動を伴う刺激」への反応が低下しており、アルコール使用障害患者は健常者と比較して脳機能が低下していることが示唆されました。端的にまとめると、アルコール依存症は脳機能異常を伴う精神疾患だと示すことができました。

これらの結果を病院のプログラムを通じて、患者さんや病棟スタッフ、ご家族にお伝えしています。今後